

Title	「鉄腕アトム」に込められた手塚治虫の思想 : <宇宙人>を迎えるために
Sub Title	The secreted message in Tezuka Osamu's Astro Boy : to meet an "alien"
Author	吉村, 和真(Yoshimura, Kazuma)
Publisher	慶應義塾大学アート・センター
Publication year	2012
Jtitle	Booklet Vol.20, (2012.) ,p.66- 83
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	Godzilla and Astro Boy 3 図版削除
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-0000020-0066

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「鉄腕アトム」に込められた手塚治虫の思想

—〈宇宙人〉を迎えるために

吉村 和真

はじめに

「鉄腕アトム」。

あまりに有名なこのキャラクターの名前も姿も知らない人は、ほぼいないだろう。

光文社の月刊『少年』に1952年4月号から同誌休刊までの1968年3月号まで連載。以後、少年誌や学年誌など複数の媒体に掲載されたほか、「アトム今昔物語」などの番外編も複数存在する。1963年には国産初のテレビアニメシリーズとして放映開始、平均30%台の高視聴率を稼ぐ。海外でも「アストロボーイ」の名でアメリカはじめ複数の国・地域で放映され、2009年にはハリウッド版CG映画が公開されるなど、現在でも高い知名度を誇っている。さらに、具体的イメージを伴った人間型ロボットのプロトタイプとして、国内外のロボット工学にも影響を与えるなど、アトムの活躍は多方面に及ぶ。

その作者・手塚治虫(1928-1989)も、「マンガの神様」「ストーリーマンガの開拓者」として広く知られる。昭和から平成の世に変わって約1ヶ月で他界したため、その人生は昭和史に重ねられることも多い。学校教科書や偉人伝の類にも登場するなど、文字通りの国民的漫画家である。

「鉄腕アトム」=国民的漫画家の代表作。

いささか冗長な作品解説を述べてきたが、誰もが思い当たるその評価にももちろん異論はない。だが、ここには留意が必要である。

手塚他界から今年2012年で23年が経つが、年月の非情さは「マンガの神様」に対しても容赦ない。筆者は京都精華大学マンガ学部という場所で教鞭をとっており、受講生たちの多くは漫画家志望のため、当然ながら他大学・学部の学生よりマンガ好きが多い。それでも授業中の反応から察するに、現役世代の大学生からしてみれば、熱狂的な愛読者も散見されるものの、手塚を「過去の偉人」と割り切っている者は少なくない。

同時に、アトムは長らく数々のテレビコマーシャルや広告のマスコット

キャラクターに起用されており、今もその元気な姿を私たちは見ることができる。現代日本では、人気があるからアトムがマスメディアに登場し、マスメディアに登場するから多くの人が今でもアトムを知っている、という図式ができあがっている。

こうしたアトムの知名度や受容の有様を考慮すれば、冒頭の記述は、次のように言い直されるべきだろう。

「『鉄腕アトム』の名前や姿を知らない人はほぼいない。だが、今や『鉄腕アトム』をきちんと読んでいる人もあまりいないのではないかと。すなわち、現代日本には「誰もが知っていて誰も知らないアトム」という禅問答のような事態が成立しているのではないかと。

そこで本稿では、以上のような「鉄腕アトム」のアンビバレントなポジションを出発点に、まず、その「誰もが知っていながら読まれていない」という事態の背景と意味を考察する。続いて、そうしたアトムへの一般的理解に対し、手塚がどんな葛藤を抱き、どう反応したか、原発問題も視野に入れて言及する。そのうえで、手塚が「鉄腕アトム」に込めたメッセージと、そこから見える手塚の思想の独自性を浮き彫りにし、〈3.11〉以後の日本社会にとっての、手塚の思想が果たし得る有効性を展望したい。

なお、ここであらかじめ本稿の基本姿勢を述べておく。

いま、手塚の存在をあまり知らない人や「鉄腕アトム」をきちんと読んだことがない人たちの存在について述べたが、本稿の宛先にはそうした人たちも含む。そのため、手塚のエピソードや作品内容については、愛読者やマンガ研究者にはよく知られた事象であっても、できるだけ具体的に紹介するつもりである。

次に、手塚に限らず、誰かの思想に対して内実に迫るという方法は、「本人ではないのだから」あるいは「本人でさえわからないのだから」という理由で批判されることもある。ただしそれは覚悟のうえで、いま、手塚の思想を検証することの意義を優先し、その方法を採用する。あくまでも本稿の主眼は、「手塚の本心」や「アトムの真実」を探りあてるのではなく、「手塚の思想の有効性」を、〈3.11〉以後を生きる人たちにできるだけ広く伝えることにある。

1. 国民的キャラクター／マスメディアの申し子

「鉄腕アトム」が「国民的キャラクター」でありながら「きちんと読まれていない」という事態を考察するうえで、改めて物語の概要を確認しておこう★¹。

舞台は21世紀初頭の日本。交通事故で亡くした愛息の身代わりとして天馬博士に作られたロボット少年・飛雄は、身長が伸びずやはりロボットに過ぎないとサーカスに売り飛ばされる。そこをお茶の水博士にアトムという名前引き取られ、人間とロボットの仲介者として活躍することになる。人間の少年と変わらぬ外見で、周囲の子供たちと同じく学校に通い、

人間ならではの喜怒哀楽の感情を学習するアトム。その一方で、十万馬力やジェット推進器など、科学技術の粋を集めた「7つの威力」★2を持ち、敵対するロボットや異星人との対決も辞さない。学校の担任ヒゲオヤジ、級友のケンちゃん・タマちゃん、アトムよりあとに誕生した両親、弟のコバルト、妹のウラン、敵ロボットのプルトゥなど、個性豊かな脇役たちも数多く登場する。

「鉄腕アトム」の国民的人気を裏付けるエピソードは多い。例えば、アニメ放映以前にも紙芝居仕立てや着ぐるみのアトムが登場するテレビ番組があったり、アトムがマスコットを務めるプロ野球球団「サンケイ・アトムズ」が発足したり、幼い頃の浩宮がアトムの人形を抱いてはしゃぐ写真が知られたり、その人気はかつてないものであった。

これらのエピソードが相互に呼応し合う形で、アトムブームはさらにその輪郭を広げていくことになるが、そうした「鉄腕アトム」受容の有様をより具体的に知るために、マンガ評論家の故・米沢嘉博（1953-2006）の回想をここで紹介しよう。

ぼくは初期「アトム」の色使いに惹かれ、光文社のA5判単行本で「鉄腕アトム」を何度も読み返した世代であるにも関わらず、テレビアニメ「鉄腕アトム」に熱狂し、マーブルチョコレート「アトムシール」コレクションに熱中した世代でもある。テレビアニメの「鉄腕アトム」は、ベビーブーム世代のものではない。放送が始まった時、彼等は中学生になっていたのだから。

変化の時代に創刊された週刊誌、『少年マガジン』『少年サンデー』も（昭和：筆者注）38～39年に大きく部数を伸ばし、遂に月刊誌は衰退していった。テレビを中心に生活が回る、週間単位の時代が訪れようとしていた。東京オリンピックを目の前に、街の風景は変わり、高度経済成長下、みんなは裕福になっていった。アニメ「鉄腕アトム」は大ヒットし、同様のテレビアニメが次々と放映されていった。この頃、雑誌マンガは赤塚不二夫を除いて面白くなっていた時期であったこともあって、ぼくはそれにのめり込んでいったのだが、それからまもなく刊行の始まった光文社の「カッパコミックス・鉄腕アトム」、アトムシールこそ大きな力を持っていたような気がする★3。

さしあたり、文中に出てくる事柄に年代や関連情報を補足しておこう。光文社のA5判単行本の『鉄腕アトム』は全3巻で、1956年6月から57年12月にかけて出版された。本邦初の週刊少年誌である講談社『少年マガジン』と小学館『少年サンデー』の刊行は59年3月。テレビは53年に初の民放局・日本テレビ放送網が開業、その約10年後の63年1月にアニメ「鉄腕アトム」がフジテレビ系列で放送開始、一般家庭へのテレビ普及を大きく後押しした東京オリンピックの開催が64年10月である。そし

て、米沢が「大きな力を持っていた」とする光文社「カップコミックス・鉄腕アトム」は全32巻で64年1月から66年9月にかけて刊行されベストセラーとなったが、収録作品は連載順ではなかった。また、アトムシールがおまけに付くマーブルチョココレートはテレビアニメのスポンサーである明治製菓から発売されていた。

米沢がお気に入りだったというこの時期の赤塚不二夫は、『おそ松くん』(62-67)をはじめ、かつてないパワフルなギャグマンガを展開していた。そして、60年代半ばにはまだ集英社『少年ジャンプ』(68年創刊)も秋田書店『少年チャンピオン』(69年創刊)も存在しておらず、少年画報社『少年キング』(63年創刊)がサンデー・マガジンの後を追っている時期であった。

当の米沢は1953年熊本県生まれ。ベビーブームより少し下の世代で、マンガ評論家のほか、コミックマーケットの準備会代表を長年務め、生前は周囲に「日本一マンガを読んでいた人」と評されるほど、マンガをこよなく愛した人物である。むろん、だからといって、たった1人の声に時代を代表させることに無理があるのは承知している。しかしながら、米沢のこの記述からは、当時のアトム受容の実態を知るうえで、以下のような事柄が見えてくるのだ。

第1に、「鉄腕アトム」が掲載されていた『少年』を含む月刊誌は、週刊誌の波にのまれる形で60年代半ばには衰退していた点。第2に、50年代半ばの「鉄腕アトム」の単行本は部分的な収録だったが、テレビアニメの人気の影響で60年代半ばによりやく網羅的な単行本が刊行された点。第3に、高度経済成長期に消費傾向が高まる中、テレビという全国メディアをバックとして、アトムシールを筆頭に、作品のみならず関連グッズも人気を博していた点などである。

ここから伺えるのは、巨視的にはこの時期に日本社会の生活サイクルが月単位から週単位へと転換していたということであり、微視的には1952年の連載開始からリアルタイムで月刊誌を追うか、60年代半ば以降に「カップコミックス」版単行本を通読しない限り、そもそも「鉄腕アトム」を「きちんと読む」ことは困難だったという事実である*4。換言すれば、テレビの浸透によるメディア環境の変化とともに、マンガとアニメ、キャラクターグッズが併存する中で、「鉄腕アトム」は受容されており、その結果、近年どころかすでに1960年代半ばを画期に、部分的なエピソードやアニメだけ、あるいはキャラクターとしてのアトムの姿しか知らない人の方が増えていたことが推察できるのだ。

すなわち「国民的キャラクター」であるアトムとは、一言で表せば「マスメディアの申し子」の誕生を意味していた。むろんそれ自体は珍しい評価ではない。だが現在、海外と比較した日本のマンガ市場の特徴が「ワンコンテンツ・マルチユース型」とされる中で、アトムブームがその祖形であったことの意味は、1960年代の日本社会を見つめ直すうえで、あらた

めて確認しておくべき事実だろう。

とりわけ「国産初のテレビアニメシリーズ」というレッテルの影響は大きく、アトムの一時的イメージを決定付けたと言っても過言ではない。「空を超えて、ラララ星の彼方…」の歌詞で始まるお馴染みの主題歌は、主人公のアトムが「正義のヒーロー」であり「科学の子」であることを視聴者に対して強烈に印象付けた。

「正義のヒーロー」と「科学の子」。明るい未来を約束するかのようこの2つのフレーズには、高度経済成長に支えられた1960年代半ば当時の日本社会の「明るさ」を重ねることができる。だが、〈3.11〉を体験した今となっては、私たちはそこにさまざまな「影」が潜んでいたことを認めざるを得ない。

そしてそのフレーズにこそ、作品内のアトムの生みの親である天馬博士以上に、作品自体の生みの親である手塚は悩まされていたのである。

2. 正義のヒーロー／悲劇のヒーロー

ファンのあいだではよく知られることだが、生前の手塚はしばしばアトムへの複雑な思いを吐露していた。自分が「鉄腕アトム」で本来伝えたいメッセージと一般的评价がかけ離れていることにストレスをためていた。そのせいで、「正義のヒーロー」として知られるアトムには、ときに「悲劇のヒーロー」の姿が重ねられてきた。

その一つの出来事として、〈3.11〉との関わりを論じる本稿において看過できない事例に言及しておこう。それはアトムと原発問題の関係についてである。

結論から言えば、手塚の意に反して、アトムはその名前のイメージから、文字通り「原子力」延いては「原発」との積極的な関係を担わされてきた。その具体的な事例が、特集「まんがと放射能」を組んだ『COMIC BOX』1990年1月号にまとめられている。

粘土細工のアトムの顔が表紙を飾る本誌は、一目でアトムと放射能や原子力産業が深く関係している印象をもたらすが、本特集の巻頭では「鉄腕アトム」に登場する主要ロボットたちが、次のように紹介されている。

「アトム／日本語で原子、物質を構成する基本」

「コバルト／原子番号27の元素で、人工放射性核種コバルト60は医療や、食品照射に使用される」

「ウラン／原子番号92の元素で、天然放射線核種ウラン235は濃縮度により核燃料にも原爆にもなる」

「プルトゥ／下界の王、冥王のことで、そこから名前をとられた超ウラン元素プルトニウムは、長崎型原爆の材料であり、高速増殖炉の燃料でもある」*5

このように原子力や放射線に縁のある名前が主要キャラクターに使用されている「鉄腕アトム」は、原発推進派にとって都合の良いマスコットとして扱われることとなった。このネーミングに関して、手塚は自伝の中で「鉄腕アトム」の原型となる「アトム大使」構想時のことを、次のように述懐している。

昭和二十五年の夏に、当時新興出版社として名の通った光文社の「少年」という月刊誌の編集長から、なにか読み切りものを描かないかと、声がかかった。(中略)／そこで頭をひねり、七転八倒して考えた末、クリスマス島で水爆実験が行なわれたことを思い出し、ああ、この科学技術を平和利用できたらなと憂い、原子力を平和に使う架空の国の話を描こうと思って、題名を「アトム大陸」とつけた。アトムとは、もちろん単に原子の意味である★⁶。

「アトム大使」については後述するが、「科学技術の平和利用」を「憂い」つつ、「単に原子の意味」として命名されたアトムはしかし、先述の通り、1960年代半ば以降の時代状況の中、まさしく「科学の子」としての役割を担わされることになる。そのことは現に、同特集で「利用される正義の味方『鉄腕アトム』のイメージ」と題して紹介されている、原子力産業に関わる法人や企業の媒体に使用された数々のアトムのイラストや名前、ロゴが物語っている。

中でもとりわけ話題となったのが「よみがえるジャングルの歌声」という作品である。あらすじは次のようだ。

かつて地球に大寒波が襲った際、アトムがあるジャングルに人工太陽を作って動物たちを救った。ところがさらに仲間を助ける必要が生じたために、動物たちは日本の「原子力大学」へ原子力発電所の原理や建て方を学びに行き、アトムがそれを教える。その結果、地震や津波にも耐えられる新たな原発がジャングルに建設され、めでたく動物たちは安心した暮らしを手に入れることになる。

福島原発事故を経験した今からすると何ともやりきれない内容だが、「正義のヒーロー」「科学の子」というアトムの一般的イメージがいかに大きく発揮されていることがわかる。ただし、本作は手塚治虫の手によるものではない。ストーリー／佐藤時朗・作画／田中省三の名で、1978年3月に漫画社から発行された原発推進PRパンフレットに掲載されたものである。一読すると「鉄腕アトム」と「ジャングル大帝」を混ぜ合わせたような設定で、絵も手塚のものではないことがわかる。ちなみに、本作の発行からちょうど1年後の1979年3月にスリーマイル島事故が起きている。

のちのインタビューで手塚は、この作品の発行が自分の知らないところで進められた真相と、自分が原発反対の立場であることを明言している。ただしそれは1988年6月1日という晩年のことであり、やはり一般的に

は「鉄腕アトム」を描いた手塚は原発に親和性があるように思われていた節は否めない。

原発の地方建設が進む1970年代。それは「鉄腕アトム」にとって、マンガからアニメにその一般的イメージが傾斜していく時期と重なっていた。しかし、念のため確認しておく、「鉄腕アトム」連載開始の1952年当時は国内に原発はまだ存在していなかったし、世界初の原子力発電がアメリカで成功したのは1951年12月のことである。加えて手塚は「鉄腕アトム」だけでなく、「来るべき世界」(51年)や「太平洋X^{ポイント}点」(52年)など、同じ時期に原水爆あるいはそれよりも強力な核の脅威や、それに向き合う人間の理性や愚かさを描いていた。つまり、手塚にとって核エネルギーとは複数作品に共通する要素ではあったが、むしろ核を扱う人間の在り方にこそ手塚の関心が向けられていたことを指摘しておきたい。

このように、手塚は「鉄腕アトム」で本来伝えようとしたメッセージと一般的评价とのギャップに悩まされてきた。これに対し手塚はさまざまな言動をとるのだが、中でも印象深いのが、『少年』での連載終了後に発表された、つまり番外編となる一つのエピソードである。

それは「アトムの最後」*7という、タイトルからしてもものしい話だ。

舞台は2055年の日本。ロボット博物館に納められていたアトムは、ある若い男女によって眠りから起こされる。2人はロボットと人間の対立の犠牲者であった。その時代、放射能と公害のために人口が激減し、かつて人間がロボットを支配していた立場が逆転してしまい、なんとロボットが人間同士の殺し合いを楽しむまでになっていたのである。ずっと人間だと信じていたロボットの両親から冷酷にそうした事情を知らされた男性は、決闘の場から逃走し、愛する女性を連れてアトムに助けを求めに来た、というわけである(図1)。

「ぼくたちの時代には人間とロボットはうわべはうまくいっていたようにみえました どうしてこうなってしまったのか……あれはごまかしだったんでしょうか？ ほんとは信じてなかったのかも……」*8と複雑な表情で語るアトムは、2人の追っ手と戦うために飛び立つ。だがそのあと、男性にとってさらなる衝撃の事実が明かされ、物語は哀しい結末を迎える。

実に救いのない話である。筆者などは読むといつも暗くなってしまう。それほど従来のアトムのイメージとはかけ離れた内容なのだ。手塚自身はこの話をアトムの実質的な最終回と思っていないと述べていたようだが、かつてからのファン、特に子供たちが少なからずショックを受けたことは想像に難くない。また、今となっては、「放射能と公害のため」という、手塚の的確な近未来予測にも考えさせられる。

しかしながら、なぜにここまで哀しい話を描かねばならなかったのか。繰り返すが、手塚は「鉄腕アトム」の人気とその受容の在り方の落差に、そして作品本来の意図と一般的评价の乖離に、複雑な感情を抱いていた。とはいえ、そもそも「誤読の自由」という言葉が示すように、作品が作者



図1 「アトムsの最後」手塚治虫漫画全集『鉄腕アトム別巻①』168-169頁全部
手塚治虫（講談社『手塚治虫全集』より）

の手を離れた後に読者がそれをどう解釈しようと自由であるし、そうした事態は常に生じることだ。しかも作品が売れていないならまだしも、人気は十分過ぎるほどあったのだ。

であるならば、いったいなぜ手塚は「鉄腕アトム」の誤読をこれほど気にかけてのか。結論から言えば、それは手塚がこの作品に込めたメッセージの重さと深さに起因していると筆者は考える。そこで次章では、若き日の手塚のエピソードに触れつつ、手塚が「鉄腕アトム」に込めたメッセージおよびそこから浮き彫りとなる手塚の思想について検証し、その思想の現在の有効性を展望したい。

3. 〈宇宙人〉との提携

1945年の敗戦後まもなく、手塚にとって生涯忘れられない事件が起きる。この事件は、手塚の作家性を論じる際にしばしば紹介されるものであり、少々長くなるが本稿の核心とも関わってくるのでそのまま引用する。

宝塚もご多分にもれず米軍高級将校の宿舎になった。ある日、四、五人の酔っ払い兵がぼくとすれちがった。

「××××××」

と、兵隊がぼくに何か訊ねた。残念ながら、「敵性語」ということで英語の勉強を中断されたっきりのぼくにとっては、まったくチンプンカンプンである。

「ホワット？ ホワット！」

と訊き返すのがせい一ぱいだ。するとたちまち、ポカーッとながら

れて、ぼくは地面へ叩きつけられた。痛さに耐えかねて起き上がれない。

ウワッハハハ……笑い飛ばして米兵は行ってしまった。手も足も出ない。占領軍に反抗すれば、射殺されても文句が言えない時代なのである。腹立しいやら口惜しいやら、意志の疎通の欠如を、ぼくはひどく呪った。

当分のあいだ、この厭な思い出はぼくから頑強に離れず、しぜん、ぼくの漫画のテーマに、そのパロディーがやたらと現われた。地球人と宇宙人の軋轢、異民族間のトラブル、人間と動物との誤解、そして、ロボットと人間との悲劇……アトムがこれなのである★⁹。

「意志の疎通の欠如」。これによって引き起こされる問題が、自分の「漫画のテーマ」になっているというのだ。具体的に例示すれば、記述中の「異民族間のトラブル」は「来るべき世界」、「人間と動物との誤解」は「ジャングル大帝」、そして手塚自身が述べるように「ロボットと人間との悲劇」が「鉄腕アトム」と重なる。その他の作品を考えてみても、たしかに手塚マンガにとってディスコミュニケーションは共通のテーマである。

しかし実のところ、この回想をそのまま表面的に理解するだけでは、手塚の思想の特徴を把握するには不十分なのだ。そのポイントとなるのが、「地球人と宇宙人の軋轢」という部分である。実はここに、作品単体のテーマに留まらず、手塚治虫の思想を解き明かす鍵が隠されている。

晩年となる1986年、「手塚治虫、創作のすべて」と題する講演会において、手塚は概ね次のようなことを述べている。

現在、人類はロケットで宇宙に飛び出すことに成功しているが、21世紀には、地球やその他の星を観測するための宇宙ステーションが作られることになるだろう。そうすると、地球の外を往復するだけでなく、宇宙で生活を営む人間が出てくるようになる。もし、そこに長年赴任していれば、カップルもできるし、結婚して子供も生まれるだろう。そんな子供は、生まれた時から地球を見下ろす文字通りの宇宙人となるわけである、と★¹⁰。

興味深いことに、手塚の意図する〈宇宙人〉とは、近未来における宇宙空間で誕生した人間のことであり、一般的に考えられる異星人のことではないのである。

この手塚が想定する〈宇宙人〉の存在を夢想と笑うことができるだろうか。つい先頃の2011年11月22日まで国際宇宙ステーションに約5ヶ月半滞在した古川聡さんの事例を思えば、むしろ異星人よりも先に、手塚の考える〈宇宙人〉が私たちの前に現れる可能性があってもおかしくないと言えまいか。

さらに筆者には、この手塚の〈宇宙人〉観が、私たちの自他認識に画期的な進展を促すように思われる。その意味を少し詳しく述べてみよう。

「私たち」と「私たちではない者」という意味での「自己」と「他者」とを区分する思考は、言語や文化、宗教や習俗など、さまざまな地理的・歴史的・社会的条件によって規定される。そのことはしばしば、ナショナリズムやオリエンタリズムといった概念で、学術的かつ政治的課題として言及されてきた。だが当然ながら、それは身近な問題としても存在している。例えば、海外旅行から帰国して久しぶりに和食を摂った時やオリンピックで自国選手を応援している最中に自分が「日本人」であることを感じるケースもあれば、高校野球やJリーグを観戦中についで地元チームをひいきにしている「地域人」の自分に気づくケースもある。

筆者自身にあてはめれば、自分は「日本人」であり「九州出身」であり「福岡県民」であり「筑豊人」であり「飯塚市民」であり、「男性」であり「40代」であり「既婚者」であり「子持ち」である。そのため、それ以外の国籍や出身地、性別や世代、家族構成の人々に対し、「私たちではない者」という感情を抱いてきたこともある。しかし、それは決して単純かつ固定的な敵対関係を意味するわけではない。なぜなら、時と場合によって「私たち」の範囲は変化するため、ずっと「私たち」だと思っていたのにいつのまにか「私たちではない者」に変わることもあれば、逆に一切関わらないと思っていた者が何かのきっかけで「私たち」に含まれることもあるからだ。

つまり「私たち」の境界は固定されておらず、意識的にその範囲を変化させたり重ねたりすることができるし、無意識のうちにそれを切り替えることもある。その一方で、「私たち」の境界を守ることに頑固になり過ぎて、「私たちではない者」に敵対心や猜疑心を抱くこともある。アイデンティティとは本来、流動的かつ重層的なものなのだ。したがって重要なのは、どのような局面で、どのような自他認識を構築すれば、それが目的に応じて有効かつ友好に機能するかということになる。

これまでの経験上、「私たち」という境界が最大限に拡張される局面は、世界経済や環境破壊などのグローバルな問題に向き合うとき、例えば「宇宙船地球丸」とか「人類皆兄弟」といったスローガンにわかりやすい形で表れることが多い。だがそれはスローガンとしては理解できても、実感を伴う形で共有するには困難が伴う。なぜなら単純だが、「私たち」は地球外生物を知らないからだ。見たことも聞いたこともない「私たちではない者」とは、いわば「他者にすらなり得ない者」であり、そうした存在に対する想像力を地球に住む「私たち」はまだ共有していないのである。

翻って、そうした存在への想像力を喚起するきっかけを、手塚の〈宇宙人〉観は持っている。異星人という「他者にすらなり得ない者」ではなく、もともと人間であるがゆえに「将来的に他者になり得る者」としての〈宇宙人〉という境界は、希望観測的なスローガンとしての「宇宙船地球丸」などとは別次元のリアリティを持っていよう。その意味で、それは、ナショナリズムやオリエンタリズムといった既存の大枠の自他認識を揺る

がし、「私たち」にその再設定を迫る契機にもなるはずだ。

したがって、手塚の〈宇宙人〉の発想は、単に奇抜というだけでなく、「地球人」という境界の現実性を高める意味でも大変効果的である。地球に住む者たちを「私たち」と実感できる自他認識を、手塚の〈宇宙人〉観はリアルに促進する可能性を有している。

さらに話を進めると、手塚は以下のような理由から、21世紀には出現すると思われるこの〈宇宙人〉が、おそらく地球の人々と接触するはずだと予測していた。

生まれながらに、地球という天体を外から眺めながら育った子どもたちは、その天体に棲む何十億という人間を、万物の霊長とは見ないにちがいないと思います。きっと他の無数の生き物と同等に、一介の生物として考えるでしょう。

その地球を、乱開発したり荒廃させたりという人間のエゴイズムを、彼らは黙認はしないと思うのです。(中略)

だから、ぼくは宇宙ステーションや月面で生まれ育った子どもたちに期待しているのです。(中略)

きっと彼ら未来人、そして宇宙人でもある子どもたちは、新しい地球規模の哲学を携えて、地球の人々に警告を発するでしょう★¹¹。

文字通り宇宙で誕生した〈宇宙人〉が、両親の故郷である地球を「外から眺め」、地球人に「警告を発する」ことで、〈宇宙人〉と地球人の接触が生じる。そうした流れは、たしかに想像できる。だが手塚は、この接触に際して、さらに次の2つの選択と結果を予測するのである。

ひとつは、地球人が〈宇宙人〉を自分たちとは異質な存在だとよそよそしく接するために、そこから何らかの軋轢が生じてしまうという結果。もうひとつは、地球人が〈宇宙人〉を元は同じ人間だとして暖かく迎え入れることによって、従来の地球人とは「まったく別種の法律やしきたり」★¹²がもたらされ、地球の将来を根本的に見直す契機が生じるという結果である。

「新しい地球規模の哲学」や「まったく別種の法律やしきたり」については別に論じるが、この二つのうちどちらが好ましいかは一目瞭然である。しかし当時の手塚には、地球人がすんなり〈宇宙人〉を迎え入れるとは思えなかった。瀕死の戦争体験、言葉が通じないだけで受けた暴力。人間同士のディスコミュニケーションを痛感してきた手塚にとって、地球人と〈宇宙人〉の提携は極めて困難に感じられたはずである。

そこで手塚は、将来地球人が〈宇宙人〉を迎え入れるための準備として、「言語の違うもの同士の意志の疎通の欠如」★¹³をテーマとした作品をたびたび描き、その克服の難しさと重要性を告発していくことになる。そして、その中でも最も有名な作品こそ、ほかならぬ「鉄腕アトム」なので

あった。

4. 原型としての「アトム大使」

「鉄腕アトム」には、近未来における地球人と〈宇宙人〉との提携という、手塚の思想が込められていた。しかしその切実な思いとは裏腹に、「正義のヒーロー」「科学の子」の顔をしたアトムばかりが有名になり、そのことに手塚が悩まされた件については、すでに述べた通りである。

ただし、その〈宇宙人〉との提携が最もわかりやすい形で表れていたのは、「鉄腕アトム」連載開始のきっかけとなった「アトム大使」であろう。同作は1951年1月から丸1年間『少年』誌上で連載された。主役は小学生のケンちゃんとタマちゃんだったが、途中で登場したアトムの評判が良かったため、翌52年からアトムを主人公にした「鉄腕アトム」が始まったという経緯を持つ。いわばアトムのデビュー作になるわけだが、ここでそのあらすじを確認しておこう（図2）。

物語は「ぼくはロケットの中で生まれ ロケットの中で育った」というケンちゃんのモノログから始まる。彼らは2千年前に滅亡寸前の地球から脱出し、ロケットの中で暮らす人間たちで、ついに「もう一つの地球」を発見する。しかし、そこには耳の大きさが違うだけの別の人間たちが先住していた。話し合いの末、両者は一緒に住むことを決めるが、人口増加を嫌う反対派の工作があり、一触即発の事態を迎えてしまう。そこで、ロケットの人間側への調停役を務めたのがアトムであった。その結果、アトムの誠意が通じ、双方の人口の半分ずつが別の星に移住するという形で、両者は和解することになる。

ここに登場する「ロケットの人間」は、まさしく手塚の定義による〈宇宙人〉であり、この「アトム大使」が、地球人と〈宇宙人〉との提携という、手塚の思想を反映する内容であることがよくわかる。見逃せないのは、双方の人間たちの外見がほとんど同じであるうえ、どちらの主張も同じ人間として理解できるため、読者は地球人にも〈宇宙人〉にも感情移入できるのだが、それなのに仲介役にロボットのアトムが選ばれるという点である。なぜなら、この点にこそ、直後に連載開始する「鉄腕アトム」にも引き継がれる、手塚の作品に通底するポイントがあるからだ。

ロボットは人間の手によって造られる。ゆえに、生まれながらにして「私たち」よりも下等な存在であるという意識を人間は持っている。そこで人間はロボットを当然のように差別し、いろんな問題が生じる。しかし、ロボットの誠意によって人間が自分らの過ちに気付いて和解する、あるいは、やはり両者は理解し合えずに悲劇的結末を迎えてしまう、という対照的なパターンで終わる。これが「ロボットと人間との悲劇」をテーマとした「鉄腕アトム」の基本構成である。エピソードによっては、ロボットの役割は異星人などに代わることもあるが、基本構成に変わりはなく、特に初期はその傾向が顕著であった（図3）。



図 2 「アトム大使」手塚治虫漫画全集『鉄腕アトム①』10-11 頁全部
手塚治虫（講談社「手塚治虫全集」より）

ロケットの中で生まれ育った人間＝（宇宙人）の登場から始まる「アトム大使」。異星人ではないその存在を地球人がどう受け入れるかが、話のテーマとなる。



図 3 「フランケンシュタインの巻」手塚治虫全集『鉄腕アトム①』137 頁全部
手塚治虫（講談社「手塚治虫全集」より）

「ロボットと人間の悲劇」というテーマが鮮明に描かれた場面。「鉄腕アトム」の一般的なイメージとの落差を感じる人も多いだろう。

手塚はこうした構成の作品を次々に描くことによって、地球人である読者に対して、近い将来接触するはずの〈宇宙人〉への「聞く耳」を持たせようとしていたのではないか。地球規模での諸問題を解決するための重要な鍵として、手塚は〈宇宙人〉の早期出現を、そして〈宇宙人〉と地球人の提携を熱望していたと考えられる。

しかも、さらに興味深いことに、この〈宇宙人〉との提携には、「必要」と「危険」の一致という、人間の行動原理に関わる課題も包含されていたのである。

繰り返し述べるように、政治や経済、環境にビジネスと、さまざまなシーンでグローバル化の波が押し寄せ、「21世紀は国際感覚が必要だ」とか「人類全体の幸せを」という、世界規模のスローガンが唱えられるようになって久しい。もちろん多くの人があることの意味や大切さを理解できる。しかし、それに向き合う自分の立場を決断し、具体的な行動に移すまでのレベルになかなかいたらないのも、また事実であろう。

例えば今回の大震災を受け、「直接被害を受けてない人たちが、被災者に頑張れというのは酷だ」とか「それでも原発が必要というなら、東京に建設すればいい」といった声を見聞することがあるが、要は「当人の身になって考えてほしい」ということであろう。もちろんこのことは、沖縄の米軍基地問題や北朝鮮による拉致被害にもあてはまる。

その気持ちはよくわかる。だが、こうした問題に直面したとき、頭では理解できていても、なかなか具体的な行動に結びつかない。端的に言ってそれは、「他者」のために行動する「必要」よりも、そのことで「自分」の時間や金銭が制約されるかもしれないという「危険」が勝ってしまうからだろう。つまり「自分」と「他者」を天秤にかけた際の「必要」と「危険」が一致しなければ、平たく言うと「他人のために行動することが自分には必要であり、かつ、そうしないと自分が危険である」と肌で感じなければ、「世界の平和」や「人類の幸福」といったスローガンのもとで行動するのはなかなか難しい（もちろん、実際に行動している人たちもいるが）。

ところが、手塚が考える〈宇宙人〉にとって、「自分」のために「他者」を受け入れることは、むしろ当然のことなのだ。

たとえば、今の地球では、宗教にしろ民族問題にしろ、あるいは経済にしろ、対決と優勝劣敗の原則が支配しているわけですよね。ところが宇宙空間に出てしまうと、相手がオレはこれが欲しいんだと言った場合、それを認めてやらなければ、今度は自分も生きられなくなっちゃう。早い話が、生きるためには相手の小便も飲まなければならぬという状況ですからね。そういう、ふたりだろうが3人だろうが、ひとつの生命体のような、同化意識みたいなものが働いたときに初めてそこに新しい宗教も生まれるし、あらゆる真理が生まれてくると思うんです★¹⁴。

もちろん地球に住む人間でも、例えば家族や会社のように、ある程度の「同化意識」を共有できる関係はあるだろう。しかし、空気にせよ水にせよ食糧にせよ、その日その時を生きるための資源が目に見えて制限されている〈宇宙人〉にとっては、「相手の小便も飲まなければならない」までのレベルで「同化意識」が刷り込まれる。「必要」と「危険」が完全に一致しているのだ。しかも、これは理屈や善意というより生理レベルの感覚であり、地球人のそれとは大きく異なる。

加えて、このような〈宇宙人〉の意識・哲学は、「地球」とか「人類」といった大問題ばかりでなく、「いじめ」などの日常の問題の解決の糸口にもなり得る。例えば、いじめっ子に対し「同じクラスなのだから仲良くしなさい」と先生が説教することがある。しかし、「なぜ同じクラスだから仲良くするのか」と反問されたら、先生はどう答えるだろうか。絶対的な正解があるわけではないにせよ、〈宇宙人〉の思想を踏まえれば、「このクラスで自分が安心して生活するには、他人や集団を尊重することが必要だから」という返答を、より実感を込めて、告げられるようになるのではないだろうか。

これに関して、本章を締めくくるにあたり、手塚の〈宇宙人〉の思想がそうした日常の問題にも触れていたことを示すエピソードを、「鉄腕アトム」からもう一つ紹介しておこう（図4）。

題して「人工衛星 SOS の巻」★¹⁵。ここには「人工衛星人」という名の存在が登場する。

地球のまわりに無数に浮かぶ人工衛星　そこに住んでいる人たちは地上の人から　人工衛星人と呼ばれていました／というわけはその人たちは人工衛星で生まれて子どものときからわずかしか地上へ来たことがないからでした　子どもたちだってそうでした★¹⁶

この「人工衛星人」もまた、〈宇宙人〉であることは言うまでもない。話を要約すると、人工衛星の信号係の子が「やーいやーい人工衛星の子やーい」とクラスメイトにいじめられ、自分の生い立ちや父の職業に不満を持つが、侵入者によって負傷した父の代わりに人工衛星を守り、父の仕事と「人工衛星人」としての誇りを取り戻す、という内容である。わずか9頁の短編ながら、クラスメイトによるあからさまないじめは、地球人と〈宇宙人〉との提携がやはり容易ではないと、手塚が考えていたことを示唆していよう。

手塚はこうした「自分」と「他者」、すなわち「私たち」と「私たちではない者」とのあいだにある壁をさまざまに描き、それを乗り越えようとすることの難しさや大切さを読者に繰り返し訴えてきた。まるで近未来に〈宇宙人〉と地球に住む人間たちとが会おうときの予行演習のように。

「個人の安全が、家族や地域、延いては国や世界の安寧に繋がる」とい



図4 「人工衛星 SOS の巻」手塚治虫全集『鉄腕アトム②』108-109 頁全部
手塚治虫（講談社「手塚治虫全集」より）

う類の思想は、それ自体決して斬新なものではない。ただ、その類の思想が積み重ねてきた歴史の厚みを基盤に、〈宇宙人〉の誕生と来訪という近未来予測、さらには「必要」と「危険」の一致を行動原理とする想像力を付加した点において、筆者は手塚の思想によりすぐれた可能性を覚える。それはとりもなおさず、個人として、「日本人」として、あるいは「地球人」として、「私たち」が〈3.11〉以後を生き抜くための、よりよい方法へと繋がるはずである。

おわりに

以上、「鉄腕アトム」に込められたメッセージおよび手塚の思想について、具体的な作品紹介を通じ、〈宇宙人〉の定義とその意識・哲学の特性、さらにはそれを受け入れることの重要性を、国際問題から日常問題まで視野を広げて考察してきた。

しかしながら、マンガという娯楽読物の社会認知度、人間型ロボットという架空の設定、SFというフィクショナルな発想、さらには「正義のヒーロー」「科学の子」という一般的評価、それらがあいまって、「鉄腕アトム」のメッセージ延いては手塚の思想を、現実問題と重ねて評価することは容易でないかもしれない。

それでも、「鉄腕アトム」に限らず手塚の作品は今も国内外で受容されているし、〈宇宙人〉と地球人との出会いは一歩ずつ近づいているはずである。すなわち、21世紀に目を向けた手塚の思想は古びることなく、しかしより鮮明に伝承されることが、いま求められている。

その意味において、最近興味深い出来事があったので記しておきたい。

ここ数年、年末になるとその年を代表するマンガ作品のランキングが発表される。その代表格であり最新版の『このマンガがすごい！ 2012』（宝島社）の「オトコ編」第1位に選ばれたのが、宮崎克／作・吉本浩二／画『ブラック・ジャック創作秘話～手塚治虫の仕事場から～』（秋田書店、2011年）である。詳しくはぜひ現物をご覧いただきたいが、本書には「マンガの神様」とは程遠い、武骨で泥っぼい手塚の姿が描かれている。

その手塚の姿は旧来のファンからすればわりと知られたエピソードであり、内容自体に新鮮味があるわけではない。だが、それを補って余りある力が本書の絵と脚本にはある。そして何より、そうしたエピソードを知る読者の数が減ったことが、「知られざる手塚」の姿を現代に蘇らせた本書の高い評価に繋がったわけである。

手塚治虫は忘れられかけている。しかし、だからこそ、いま、手塚ならびにその作品の再発見には新鮮な魅力が満ちている。

先述した「アトム最後の」舞台は2055年。放射能と公害のために人間がひとり立ちできず、ロボットに支配されるという時代設定であった。はたしてその頃、〈宇宙人〉は誕生しているだろうか。それともすでに地球に来訪しているだろうか。あるいは福島原発事故の処理は完了しているだろうか。はたまたマンガのように、放射能や公害の影響で人間はひとり立ちできなくなっているのではないだろうか。

地球人＝「私たち」が歩もうとしているこれからの数十年先には、どのような選択と結果が待っているのか。そのより良い道筋を見つけるためのヒントや課題が、「鉄腕アトム」をはじめとする手塚作品には、まだまだ秘められている。

註

☆1 —— マンガおよびアニメの「鉄腕アトム」に関して、今回使用した主要文献は以下の通り。

手塚治虫『鉄腕アトム大図鑑』（講談社、1993年）、『びあ アニメ鉄腕アトム生誕30周年記念出版 鉄腕アトムワールド』（びあ、1993年）、霜月たかなか・司田武己『完全保存版 鉄腕アトムコンプリートブック』（メディアファクトリー、2003年）、大塚英志『アトムの命題 手塚治虫と戦後まんがの主題』（徳間書店、2003年）、森晴路『図説 鉄腕アトム』（河出書房新社、2003年）、津堅信之『アニメ作家としての手塚治虫』（NTT出版、2007年）。

内容紹介ならびに図版引用に関しては、後述の通り、「鉄腕アトム」の単行本には複数バージョンが存在しているが、現在でも入手しやすいという理由から講談社全集版を採用する。

なお、逐一紹介はしないが、このほか、手塚治虫に関する先行研究にはほぼ「鉄腕アトム」への言及があるうえ、講談社全集版『鉄腕アトム』の巻末など、さまざまに手塚自身の回顧や解説もあるので、興味のある方は適宜参照いただきたい。

☆2 —— 「7つの威力」は話の展開に応じて部分的に変化するが、初めて描かれたときは「7つの偉力」と表記して—①ジェット推進で大空をすばらしい速度で飛べる、②耳のボタンをおすと聴力が1千倍になる、③相手が悪人かよい人間か見

- 分けられる、④うでの力は10万馬力、⑤どんな難しい計算でも1秒間でやれる、⑥目がサーチライトになる、⑦のどの変話器のおかげで60ヶ国語を話せる一であった。
- ☆3 — 米沢嘉博「アトムと時代と僕と校庭で…」(前掲手塚治虫『鉄腕アトム大図鑑』所収、134頁)。なお、米沢は手塚を論じる世代について、『新宝島』に直撃した1935年前後生まれを第一世代、ベビーブーム世代を第二世代、そして自らを含む手塚の仕事が広がる過程を目にしてきた世代を第三世代と位置付けていた。これに従えば、1971年生まれの筆者は第五世代、90年代生まれの現役学生だと第七世代あたりになる。
- ☆4 — 補足すると、講談社『手塚治虫漫画全集』の「鉄腕アトム」は別冊も含めて1979年から82年まで刊行されており、これにより初めてほぼ掲載年順に収録された。このほか、単行本『鉄腕アトム』の詳細情報については、前掲森晴路『図説 鉄腕アトム』を参照のこと。
- ☆5 — 『COMIC BOX』VOL.69 (ふゅーじょんぶろだくと、1990年1月号) 22-23頁。
- ☆6 — 手塚治虫『ぼくはマンガ家 手塚治虫自伝1』(大和書房、1979年) 117-119頁。
- ☆7 — もとは単に「鉄腕アトム」というタイトルで講談社『月刊別冊少年マガジン』1970年7月号に掲載されていたが、のちに「アトムの最後」と改題された。
- ☆8 — 手塚治虫漫画全集 251『鉄腕アトム 別巻①』(講談社、1982年) 184頁。
- ☆9 — 手塚治虫『ぼくはマンガ家』(大和書房、1979年) 43-44頁。
- ☆10 — 手塚治虫『未来人に託す私のファンタジー』(新潮カセット・講演、新潮社、1990年)の一部を筆者が要約。
- ☆11 — 手塚治虫『ガラスの地球を救え』(光文社、1989年) 172-174頁。
- ☆12 — 「そこでは、地上とはまったく別種の法律やしきたりが支配するのです。なぜなら、そこに住む人は、地上の常識とは無縁の一異質な環境で暮らさなければならぬからです。たとえば水を取りあげても『限られた水』という観念が優先するでしょうし、自然界というものに包まれず、コンピューターと共存共栄の世界に住むわけです。」(同上、172頁)。
- ☆13 — 手塚は著書『マンガの描き方』(光文社、1977年)の中で、「言葉の違う者同士のヒューマン・リレーションの欠如。ぼくにとってこれは、意識的にとりあげなくとも、無意識に出てしまうテーマである」(170頁)とも述べている。
- ☆14 — 一億人の手塚治虫編集委員会・編『一億人の手塚治虫』(JICC 出版局、1989年) 411頁。
- ☆15 — 原題は「小惑星SOSの巻」(光文社『少年』1959年、夏の増刊号掲載)。
- ☆16 — 手塚治虫漫画全集 222『鉄腕アトム②』(講談社、1980年) 108頁。

(よしむら かずま・京都精華大学マンガ学部准教授、
国際マンガ研究センター長／思想史、マンガ研究)